

人のもの真似をしていくと枯れていくんだ

造船技術を建築に活かす、それを実現することで建築家の数多くの作品を完成させてきた高橋和志氏。異分野技術の融合を果たしたのは、彼自身の、ものづくりへの姿勢、仕事への思い、生き方が可能にしたのだろう。彼の目に映る建築の姿は、我々の目に映るものとはすこし違うのかもしれない。

聞き手 = 古阪、鵜川、杉村、藤井、西尾、玉井 2014.8.2 宮城県気仙沼市、高橋工業本社工場にて

株式会社高橋工業について

——会社を立ち上げたきっかけは何ですか。

私の家系は代々続く船大工の棟梁でした。しかし、70年代の漁業海域の縮小やオイルショックの影響を受け、取引船主の相次ぐ倒産により、1985年に家業の高橋造船もやむなく廃業してしまいました。しかし、食べていかなければなりません。その場合、自分の得意分野で生きていくしかありません。どんな分野でもスキルの上に立ったやり方しかありません。私の場合、会社が倒産した、雇い主がない、自分の能力で生きなければならない。さあどうするという時に、自分には船の技術しかない、ただそれだけです。その年に弟と二人で協力して、船の修理と鋼構造物工事を目的としたこの会社を立ち上げました。

——造船から建築へ参入したきっかけは何ですか。

1994年にオープンした気仙沼市の「リアスアーク美術館」の建設に関わったことです。独創的で斬新な設計で、入り口の壁に大きく湾曲した鋼板がデザインされていました。これは建築ではコスト的にも技術的にも難しいとされていましたが、造船技術で一般的な「鍛鉄」を応用してつくり上げました。その後も、仙台の「せんだいメディアテーク」の建設等にも参加しました。

造船からみた建築

——造船と建築の考え方の違いは何でしょうか。

基本的には材料力学や構造力学の考えを応用するだけで、設計者としては同じです。船は海が相手、建築はやっぱり人が相手。技術的な点で大きな差はありません。

——海に浮かぶ船は沈む、陸に立つ建築は壊れる、この違いは大きいように感じます。

固定するから壊れるのです。だから、壊れやすいのは陸です。「軽くする」ということがものづくりの一つのポイントです。陸の建築は重くても沈まない、つまり許容度を大きくつくり過ぎます。その点に関して、建築の設計者と議論したことがあります。例えば障子紙をのりで貼ること、これは意匠と構造と材料が組み合わせさった形です。ところが、その設計者は小さい格子に障子紙を張り付けるときに、画鋏ならまだしも、一寸釘、二寸釘で打つような方法をとろうとしました。それは合理的とは思えません。おそらく部分で設計するからそうなるのでしょう。そう文句を言っていたら建築家の石山修武さんに「船のことはあなたがよく分かっているが、陸のことは建築の人に任せなさい」と言われてしまいました。しかし、建築基準法がどうかは知りませんが、常識的に考えて、間違っているものは間違っていると思います。そういうやり方は好きではありませんね。

——建築のものづくりで不思議に感じることはありますか。

意匠家や構造家がいることです。意匠家の中には、まるで絵を描くことをデザインだとする人や、また構造家の中には図面の上ではものを作っていますが、実際の鉄の重さを知らない人がいます。質感・量感を肌の感覚でわからない人間が構造設計するのは難しいのではないのでしょうか。数字と実際が一致しないのだから。昔のように電卓やそろばんでやっていたらいいですが、今は計算ソフトを使ってインプットとアウトプットをするだけで、中身が分かっていない事務所さえあります。でも、どういう設計をするのかも、その人の生き方なのだと思います。あと、建築で面白いと感じるのは模型をつくることです。造船で模型をつくることはほぼありません。完成したものの模型をつくることはありますが、打ち合わせでつくることはありませんね。



高橋工業本社工場の外観

——建築の場合、発注者に理解してもらうために模型をつくりますね。

発注者の性格が少し違います。客船に乗る人に「こういう設計でつくります」と言う必要はありません。発注者であるのは船のオーナーや乗組員で、彼らは素人ではありません。だから、プロがプロを相手にするから子供だましはできません。建築の場合、知識の少ない発注者に説明することが多いため難しいのだと思います。建築の発注者は、自分が理解したいために模型を求めますね。プロ同士なら要らないはず。船の場合は実物、モックアップをつくることはありますが、使い勝手の異なる模型をつくったところで意味がありません。

——船の設計は全部一人で行うそうですが、建築の場合、全部一人で設計できる人はいないですね。

建築の場合、大工でもつくるのは柱と梁の軸組だけ。指物や神棚、欄間、彫物までつくることができれば大したものだと思います。昔の棟梁は全部つくっていたようですが。船の場合、例えば配管はほぼ全ての工程を自分の造船所で行うのが当たり前です。建築では配管をあとで考えるのですよね。45度とか、90度とか、パターンが決まっているからだと思いますが、船の配管にはカーブがあります。あと、建築はパイプをねじ込むから途中で交換ができませんが、船は修理できるようにフランジをボルトでとめます。そういうところも違います。配管でいえば、雨水、飲み水、汚水、油圧、電気など様々にありますが、私は全部一人で設計した経験があります。一人でできるようになるまで、学校卒業してから20年ぐらいでしょうね。

——建築は何十年経っても全部できるようになる人はほとんどいません。

デザインや意匠といった、建築家には建築家なりのやり方があ

てもいいと思います。でも、それは設計とは違うように思います。つくれるものをつくるのが設計ではないでしょうか。だから「設計家」ではなく「建築家」なのだと思います。そういう意味で建築家の方は、個性が強いですね。

——建築を設計する時、与条件を最初に考えることが多いです。場所と敷地、大きさ、プログラムなどから考えます。

つまり自分が決めたことではなくて周りの条件や情報から決めていることになっていますね。それなら話は簡単です。設計でなくてインタビューなんですから。船の場合はそんなことは考えません。北洋に行くのか地中海に行くのかインド洋に行くのか、マグロかカツオか、それだけです。誰が考えたって、太平洋に行く場合は何ノットで行く必要があるかは決まっています。自分で歩いて旅をするとき、東京に行くか、仙台に行くかでリュックサックの中身は違います。3日か1ヶ月かでも。どこに行くかで決まる話です。マグロを獲って利益を得て、次も獲ろうとするならどれぐらいの魚を獲るのかといった最適設計が必要になります。それによって最低限の乗る人が決まってきて、自ずと魚のスペースとか船のスペースなどが決まってきます。

他の主体との関わり方

——実際に建築家と仕事をされる際、建築家からどのような図面を受け取るのでしょうか。

下手にきれいな図面をもらうよりも手書きのスケッチの方が分かりやすいですね。例えばCGの図面を送ってこられると分かりません。余計なものはいいません。建物や人の大きさを描いてくればよく、建築全体を見て考えているわけではないので、意匠と構造を兼ねたようなものが分かればいいと感じます。

—CGで送られてくることが多いのでしょうか。

おそらく建築家が描いたものを、その所の員の方がCGにしたのでしょう。きれいに表そうとしたのでしょうか、それは建築家の考えではなくなります。やりたいものをズバッと行ってくださいの方が、鉄がいいのか、あるいはコンクリートがいいのかがすぐ分かります。つまり、形が欲しいのか、素材の力強さが欲しいのか、そういうことを知りたいのです。CGは一見きれいなように見えて、何を意図したのかが伝わってきません。細かい取り合いは図面で後から考えればいいのです。つまり建築の考え方が知りたいのです。

—建築家との仕事はどのように進めるのですか。

建築家のプレゼンに対しては、金額が何億であろうとあまり気にしません。まず、その考え方やデザインに興味を持つか持たないかで決めます。面白いと思ったら、すぐにスケッチに描いて、そして作り方や考え方を描きます。デザインには口は出しません。アルミやスチールをこのように加工するといった、具現化の考えを示します。最後に数量と単価を書いて、金額を出します。見積書は項目ごとには書きません。相手が知りたいのは、今のデザインをいくらでできるのかということなのです。

—ゼネコンとはどのような形で関与していますか。

ゼネコンは何も言ってきませんね。私には、ゼネコンはものをつくること以外にすることが多過ぎるように見えます。ゼネコンにはゼネコンのやり方があるのですが、私はそういうやり方に染まらないように距離を置いています。一方で、気骨のある建築家も少ないように感じます。ゼネコンに隙を与えてしまっているような。自分がこうしたいという事に対しては引かない、癖のある、個性的な建築家が減ってきたのではないのでしょうか。「俺に任せたら黙って見とけ」くらいの勢いが欲しいですね。自分たちで考えて「これが私のやり方です。それで批判されるなら建築家辞めます」くらい言えればいいのですが。みんなの意見を聞いて責任を取らないようなやり方が、一番危ないと思いますね。

—造船と建築の費用の考え方は違いますか？

建築では、費用は数量×単価で決めるのが基本的な考え方です。ゼネコンが行っていることは、ものづくりというよりも、管理・マネジメントで、実際にものをつくってお金を決めるのは専門工事業者です。一方、造船は自社で設計して、自社で値入れしているから、目利きがあります。パッと見ただけで、なぜ1億円違うのがすぐ分かります。しかし、あまりゼネコンのやり方をどうこう考えたことはありませんね。

—ものづくりの考え方は組織によって異なりますね。

結局はそこにいる社員個人の違いだと思います。気が合わない人とは話さなくてもよいと思っています。そのうち相手のおいで、どんな人間かわかるようになるものです。普通の生き物はそうなんです。人は親切にしてくれるもの、人は暴力をふるわないものという考えは間違いです。ライオンよりトラより怖いものは人間。人間を襲うのは人間。だからこそ生き延びるために心身共に鍛えるのです。心も身体も守られていることがどれだけ幸せかということを知るのは大切です。



会社経営とものづくり

——高橋工業の社員は何名いらっしゃいますか。

現在は8人です。事務1人と現業技術4人、設計技術3人。ほとんど皆が、鉄板の加工なども含めて現業を行っています。熟練度の違いはありますが、組織の考え方として、10人を統率する人が一人いれば、全体が何をしているかわかります。10人いれば一つのプロジェクトが出来ます。

——少ない人数で仕事をすると、皆の技量は上がりますが、会社の規模が大きくなると建築のように分業になっていきませんか。

考え次第ではそうはなりません。50人の組織をつくるためには、5人をその人と同じレベルの人材に作り上げればいいのです。社員が多いからといって、技術が高いというわけでは必ずしもありません。

——大規模造船所では管理をする技術者と親方的な技能者の組織で船をつくっていると聞きます。

造船所は勝海舟がつくったドックが最初で、つまり欧米型の技術を導入してつくったものです。技術云々は官側であって、下請は人集め役でした。戦時中は、造船も強制労働で行われていました。管理の考え方は「官」の考え方がそのまま発展してきました。働く側と管理する側とが別であるのは、良いのか悪いのかという話になりますが、私は技能者＝技術者である方が正しいと思います。技能者と技術者を一緒にしてはいけないのか、と思っています。構造をやるにしても、「溶接とは何ぞや」ということが分からなければ意味がないですし、構造計算を示しても実際作業をやってみなければ分かりません。図面に傷がないということは、実践が分からないから傷がないということ。見ただけでは分からないものもあるのではないのでしょうか。

——中小の造船所にできて、大規模な造船会社にできないことは何ですか。

船も建築と同様、人が増えれば管理をする人が必要になります。規模が大きくなれば管理造船になり、大組織になります。大手の会社で儲かっていないというのは、生産に寄与しない、管理する人間が多すぎて、それに払う金が多くなるからです。管理と生産が逆ピラミッドになっているのでしょう。

大手の造船会社に私の後輩もたくさん行っています。組織の中では役に立つかもしれませんが、自分一人では何もできません。生きていけることは確かですが、自由度はありません。一人でも、腕が良ければ好き嫌いは言えますから。

——造船は設備投資が大きいという印象を持つのですが。

結局、鉄骨製作者は自分のために投資するわけではありません。つくるものが限定されますし、汎用機械ではないから、すぐに体力がなくなります。つまり、単価の切り下げを交渉しないと仕事がないのが現状です。そもそも、つくる側と買う側は対等であるべきでしょう。他の鉄骨製作者を見ていると、いようにしかされていません。同じ設備の工場を持てば、高いも安いもありません。人しか変わらないはずです。

船の場合ももっと汎用性のあることしかしません。つくるものが決まっていると生産効率を上げることが重要ですが、造船はそうではありません。どんな大小の船でも対応できるような機械を整えます。鉄骨製作者の多くは、工場を止めない仕事、ロボットを止めない仕事、道具に合うような仕事を求めています。本来のものづくりは逆であるべきです。

——逆といいますと…。

ものをつくることと経営することは違います。ものをつくる大きな会社の社長でも経営のことに偏りがちです。昔の漁業会社は造船もしていました。多角経営などと言われていますが、百姓にも色々なことをやっていた人はいます。そのように経営することに興味がある人もいますが、私にとっては「ものをつくること」が楽しいのです。

ものづくりに対する姿勢

——高橋さんは船のことを好きですか。

あまり好きではないですね。というのも好きになると適当にやっ
てしまうからです。技術屋が好きと言うといいものはできません。
例えば、設計事務所を開いて自宅を設計することはとても
難しいように思います。わかりすぎるからです。自分がその中
に入り込んでしまうから。つまり、客観的に見るということが
重要なのです。好きほど云々と言いますが「好き」という考え
方が違います。逆に、建築は私にとって客観的に見ることで
きます。「こういうことができないんだ」「こういう考えなん
だ」と。だから、他の皆さんからは斬新に見えるのだと思
います。造船の立場からしたら簡単な話です。一言で「鏡鉄」や
「嵌め合い」などと言っていますが、皆さん分かっているよう
で分かっていません。興味があって建築を勉強し始めると終
わりだと思えます。興味と実際とは違いますからね。

——実家でも大学でも船が身近にあったのにもかかわらず、そ
れでも船に興味がないのは不思議に思います。

小さい頃から船を身近に見てきたからではないでしょうか。ど
んなことでも身近にないから興味が湧きます。山の人間は海に、
海の間人は山に興味を湧くように。けれども、他に飛び出すに
は体力が必要です。体力のある若い時期に飛び出してみること
が大切です。ほとんどの場合、「こういうことがやりたかったん
だなぁ」と気づいた時には6、7割は終わっています。先生に
教えてもらっても、頭で分かることを勉強しないと意味があ
りません。少ない知識で最大限の発想をしないとダメです。勉
強というのは、自分の考えたことと実際を比べることであ
って、調べることではありません。

——教えてもらうだけでは駄目なんですね。

「つくる」ということは簡単な知識でできますからね。ただ、ど
ころてんのような繰り返しの仕事は、1年経つと慣れてしまい、
それ以上の工夫のしようがなくなります。ベテランになると、
腕を磨きようがなく、頭打ちになってしまいます。同じものを
同じようにつくとそういうことになるのです。そうならない
ためにも、次にものをつくるときに、「今度はどうしようか」、「ど

のようにつくりか」と考えることが学習だと思います。同じ
ことをするだけでは慣れてしまい、向上心や向学心はなくなり
ます。新しいことにチャレンジするから、考える必要が出てく
るのです。面白い仕事は「飽きない仕事」、「考えながらできる
仕事」です。設計も現業も同じで、考えられる仕事が一番楽し
いと思います。一からやることは大変だけれども、一つの仕事で6、
7割は今までの知識が役に立つ、残りの3割に面白さを感じます。

求める建築家像

——建築家はどうかあるべきだとお考えでしょうか。

「どうかあるべき」といったことは考えていません。建築家がい
ない場合でもゼネコンがきちんとつくれば、それでいいと思
います。「建築家」と言っても、その多くは「〇〇設計事務所」
です。発注は個人ではなく、会社である事務所に対して行われ
ます。その代表がたまたま建築家であるだけです。行政や民間
などが、個人に直接頼むわけではありません。工事を請け負
う会社になって建築家はいます。

でも、建築家と付き合いっていると、たまに飽きてきます。「飽
きる」といっても、その人の分野にはもう関わらない、とい
う意味ですが。結局、建築家は他人の依頼で自分のつくりたい
建築を実現しようとしているから、そこに苦勞が付きまとうの
は当たり前です。建築家はそのような苦勞をしなければなら
ません。そういう苦勞を私はするつもりはありませんけどね。

——建築家にもいろんなタイプの人がありますよね。

とても洗練されている建築家や、人間味のある建築家など様
々な方がいらっしゃいますね。市民や行政を巻き込んで建築
を形にする建築家もすごいと感じますが、こうと言ったら聞
かないタイプの建築家に私は魅力を感じます。

また、建築家の先生の下にいる人は、その建築家のタイプに
似るような気がします。自分で商売始めても、結局元のところ
と同じスタイルになります。大手の設計事務所にいたとい
っても、3年以上はいない方がいいと思います。染まってしまう
から。どんな商売でもそうです。もっと自分で自由にやり
たいなら、3年ぐらいで他に移った方がいいと思います。そ
うでなければ、自分で設計しているのか、その建築家の考
えで設計しているのか分からなくなってしまいますよ。

——大学卒業後、仕事を始めてから考えることも多いと思います。

そもそも、大学を出たてのような人間が客先に出るべきではないと思いますが、大学にいる間に社会に出ても挨拶などをきちんとできる人になるべきです。私がお客さんと打ち合わせをするときは、その会社の名前や、バックなどは関係なく、聞く人本人の姿勢を見ています。相手に聞く気がないなら途中で帰ることさえあります。聞く姿勢は大切なことです。社会に出て、勉強が必要になって初めて身に入ることもあります。教えられた知識なんて役に立ちません。私も大学院から帰ってきた時に会社が倒産して、さあ家族を養わなければならない、となって、やっぱりピリッとしました。技術屋ですが、最初に勉強したのは法律です。人と同じ分野で戦うためには、同じルールを知る必要があります。最初は憲法、それから商法。建築基準法や造船法が、法律のどのランクにあるかを知らなければなりません。でも、法律はあとからでも読めば勉強できます。数学とか物理とか技術は、すぐ読んだら分かるものでなく、積み重ねで身につくものです。それと、体力もあった方がいいでしょうね。

——仕事に対する姿勢で大事なことは何ですか。

仕事は真面目にやるべきです。「真面目」とは、「誰のために」ということです。「一生懸命頑張っています」と言う人いますが、それは誰のためかということです。二言めには皆のため、他人のため、とか言いながら、自分のためにやっているようにも見えます。それを使い分けるのが悪いのです。震災でたくさんのボランティアの方が来て下さりましたが、中には自分がやりたいのか、誰かを助けたいのか、それを勘違いしている人もいました。誰のためにやっているかが大切で、自分のためなら自分のためだけにやればよいと思います。ある力量がつけば、それは人のためになります。力量がついていないのに、皆にお世話になりながらボランティアをしても無駄です。真面目にやるということは、自分のためか、それとも他人のためか、どちらかです。あいまいな使い分けはよくありません。

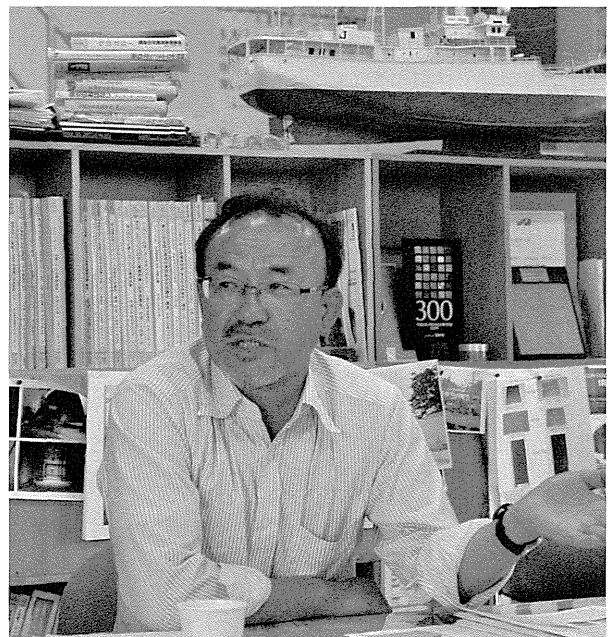
学生に向けて

——学生に向けて一言お願いします。

大学にいて、頭だけ磨いていてもダメです。スキルを磨いて、知識を得たなら、3割は外に出す、広く社会に活用することが大事です。頭の中にあってもただの図書館であって、知識を蓄えるよりもその出し方が重要なのだと思います。自分の持論が支持されるところで戦うなら、誰も批判する人がいません。ところが塙の外で戦ったことがない人は、外に広めようとしても自分の話したいことが通じません。そういった面では大学では実戦が足りないのだと思います。

また50代後半になって、生き方を変えるようなことなんて無理です。しかし、仕事なんていくらでもあります。つまり「どのように生きるか」が重要であって、どんな仕事かは関係ありません。今まで親の脛をかじってきたのだから、社会に出たら親に返すのは当たり前です。それで自分のためだとか、他人のためだとか、仕事の大切さが分かるのです。そうすれば段々と生きるための方法論を考えるようになります。「こんな生き方でいいのか」、「この会社でいいのか」と。そこまできてやっと成長したといえるでしょう。そうすれば、また勉強したくなって今の会社よりもっといい場所があるように思えてくるでしょう。

(終)



「あんたに居てもらおうと（地域にとって）迷惑だ。気持ちは嬉しいが、早く滋賀に帰りなさい」。

竹の会所の建設が佳境に入っていたとき、学生リーダーになると志願した大学院生に高橋さんはこう仰られた。彼女は滋賀県立大学の初代卒業生で、卒業後竹職人として腕を磨いたあと建築設計に携わっていたのだが、「竹の事をもっと研究したい」と博士後期課程に入学してきた。既婚者で入学後出産し、子育てをしながら通学していた。

ものづくりが大好きで、高橋工業さんとの現場に連れて行ったら職人さんたちとも意気投合して、すっかり高橋工業ファンになっていた。そんな時、震災が発生。

「地域の竹でみんなの場所をつくろう」と学生たちに呼びかけた時、“竹で実際建物を建て、それが大好きな高橋さんたちのためになる”なんてことは二度とない、と真っ先に協力を申し出てくれ、現地での調査や事前準備にも積極的に参加してくれた。

そして意を決して家族を説得し、長期間にわたる現地 WS で「皆の先頭に立って頑張ります！」と宣言した彼女に高橋さんは先のように言われたのである。

真意がわからず私も彼女も絶句したのだが、その言葉の奥には高橋さんのブレの無い人生観があった。

「あんたが来てくれたら作業がはかどること間違いないし、またとない機会だと言う気持ちもよくわかる。だけど良く考えてみる。乳飲み子のいる母親が家を空けるなんてありえないだろう。それはダメだ！」

「何故ダメなんですか？ 母親も主人も是非行っておいでと後押ししてくれているし、子供もおばあちゃんにすっかり懐いているので大丈夫です」と泣きながら訴える彼女に対して、「子供にとって一番大事なのは母親なんだ。子供をそんな目に会わせて来てもらっても誰も喜ばない。却って迷惑だ」と、頑として譲ることはなかった。

震災後、ボランティアを志して卒業後就職せずに被災地で奮闘していた若者たちにも「なぜ働かない？ 自分の暮らしも出来ない人間が人を助けられるわけは無い。顔を洗って出直して来い」と容赦ない。

「もちろん仕事には命をかけなければいけない。しかし、それは家庭があつての話だ。家庭を築けない者がものを築けるわけがない」と高橋さんは何時もおっしゃられる。家庭を顧みない仕事人間は全否定だ。もちろんスローライフや余暇人間のことを言っているのではない。家族を愛し、地域を愛し、仕事に命を捧げるのが“ホンモノのプロ”なのである。

震災後初めて気仙沼を訪れたとき、「オレ達のことより、子供たち、孫たちに胸を張って残せる地元をつくらなといけないうんだ」という高橋さんの言葉に胸を打たれた。誰もが目の前の自らの生活や仕事のことを考える中、「地域の子供たちが夢と希望を持てること」を想っておられたのである。

その後、我々が気仙沼を訪れるとき、まだまだ暮らしが不自由な中で多くの学生たちを受け入れ続けてくださるのも、“次世代の子供たちへの愛”があるからだと思う。

高橋さんは何時も直球ストレートな口調なので誤解を与えることが多いが、その内側は何時も“人間愛”に満ち溢れている。

仕事に誇りを持ち、誰に媚びることもなく志を貫き、次世代に生き様を伝える。高橋さんの生き方は「男の本懐」である。

震災で流されてしまった社屋に掲げられていた「高橋工業経営理念」がそれを表している。

- 一、 私達は、造船の技術を融合し、創造意欲に満ちた作品を造ります。
- 二、 私達は、作品に心を託し、創造性豊かな社会の繁栄に貢献します。
- 三、 私達は、個性を尊重し、たえず学びながら、夢と希望を共感できる社会を目指します。